

葉太郎の枇杷雪

南部町寺内

絵：野口宣友



昔おかし寺内の枇杷サコと言
う土地に、天をつらぬくような
枇杷の木がありました。月明かり
に照らされた影は、向かいの小高
い丘の上に建つ坂根の観正寺にま
で届き、木の影の先には宝物が埋
められていると噂されていました。

この枇杷の木のある寺内と三
崎の名主さんの家には、長いひげ
を頬一杯に生やした禄兵衛さんと
いう背の高い大男の執事がいまし
た。禄兵衛さんはいかつい顔とは
正反対に心のやさしい人で、世の
ため、人のためになることには惜
しげもなく大金を出し、貧しい人
たちを助けていました。禄兵衛さ
んを、土地の人々は「崎内の大尽」
と呼んで大層尊敬していました。

禄兵衛さんは、お金や物には何
一つ不足していませんでしたが、
子どもがいないことだけが唯一の
悩みでした。

ある寒い冬の雪がしんしんと
降る日のこと、昼に降り積もった
雪も夜になるとピタリと止み、冬
空をお月様が明るく照らしていま
した。近くの常清へ出かけていた

禄兵衛さんは、用事を終えて、
女房のおしをさんと家へ帰ろう
としていたところ、いつも大きな
影を観正寺にまで届かせていた枇
杷の木の影が、この日は法勝寺川
の土手までしか届かず木先の端
の影が消えてしまっていました。

禄兵衛さんたちが不思議に思
っていると、突然、凍りつくよう
な赤ん坊の泣き声が上がりました。
雪をかきわけて川土手の下へ行く
と、木箱の中で可愛い赤ん坊が泣
いているではありませんか。禄兵
衛さんたちは「こんな寒い晩にな
んとしたことだ」と赤ん坊を抱き
上げ、急いで家まで連れ帰りまし
た。赤ん坊は暖かい家ですやすや
と眠りにつきました。

この可愛い男の子の赤ん坊は
禄兵衛さん夫婦にすつかりと懐き、
夫婦は相談して、この子を自分た
ちの子として育てることにし、雪
の降る日に出会った子だからと
「雪太郎」と名付けました。禄兵
衛さん夫婦は「枇杷の木の影の先
に宝があるという噂は本当だ。こ
んなに素晴らしい宝物を授かっ
た」とたいへん喜びました。

月日が流れ、雪太郎は大きくな
り、立派な男の人に成長しました。
ある日、近所に住む太吉という少
年が、原因不明の病気になる、医
者に診せると治らない病気だとい
われました。それを聞いた雪太郎
は枇杷の木まで駆けていくと、枇
杷の葉を取り始めました。雪太郎
は枇杷の葉を10枚ほど取ると、急
いで駆け戻り、蝋燭を10本立てて
葉の表面を火にかざし、焦げない
ようにあぶると、葉を10回ほど摺
りあわせて、まだ葉が熱いうちに
太吉のお腹に乗せ、押しこめよう
にしてなでました。雪太郎が不眠
不休でこの治療を続けると、太吉
の肝炎が治り、雪太郎の枇杷の葉
の温灸療法は巷でも大変な評判と
なりました。

後に雪太郎は京に上って漢方
薬剤師として勉学に励み、村に戻
ると中田洪雪と名乗って村のやさ
しいお医者さんとして皆に慕われ、
地元にお医者さんが来たとき近隣の人たち
にたいそう喜ばれました。

おしまい